

北方領土青少年等現地視察事業 研修報告用パネル（A1サイズ）

①

北方領土青少年等現地視察事業 研修報告

～令和7年度 参加者の学びと気づき～



実施日 令和7年8月22日（金）～8月24日（日）（2泊3日）

派遣先 北海道・道東地域（根室市、別海町、標津町等）

参加者 25名（中学生・高校生・引率教員等）

研修の目的 「北方領土問題への理解を深め、次世代へつなぐ」



【素材提供：独立行政法人北方領土問題対策協会】

②

北方領土青少年等現地視察事業行程

期日	主な訪問先
8/22 （金）	北方領土館 別海北方展望塔
8/23 （土）	北方館・四島のかけ橋・納沙布岬 元島民による講話 北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）
8/24 （日）	道の駅スワン44ねむる 明郷 伊藤☆牧場



北方領土のイメージキャラクター、エリカだっぴー！ みんなに北方領土について知ってもらいたいんだっぴー！

主な訪問先

北方館

北方館は、北方領土返還要求運動原点の地である北海道根室市の納沙布岬にある北方領土問題の歴史や経緯を展示する啓発施設です。目の前に広がる北方領土を望みながら資料を通して学べます。

北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）

北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）は、国内外の人々に北方領土問題への理解を深めてもらうための啓発施設です。また、北方四島に居住するロシア人の方々との交流を促進する拠点としての役割も担っています。



北方館訪問の様子



ニ・ホ・ロ訪問の様子

【素材提供：独立行政法人北方領土問題対策協会】

北方領土青少年等現地視察事業 研修報告用パネル（A1サイズ）

③

元島民による講話



元島民による講話（得能 宏 氏・色丹島出身）

講話では、色丹島出身の元島民・得能宏氏より、終戦後のソ連軍侵攻により島民が生活基盤を奪われ、引き揚げを余儀なくされた当時の状況について、生々しい体験を交えて説明があった。得能氏は、突然の占領下での不安や、過酷な収容所生活、引き揚げに至るまでの困難を語るとともに、故郷への強い思いや、現在も帰還が叶わない現状への複雑な心境を述べた。また、戦後に交流したロシア人住民への理解を示しつつ、「北方四島は本来日本人が住んでいた島である」との信念を示し、北方領土問題への継続的な関心と理解の重要性を訴えた。



得能 宏 氏



得能さんに質問する様子

【素材提供：独立行政法人北方領土問題対策協会】

④

北方領土青少年等現地視察事業を 終えて参加者からの感想①

北方領土が“近くて遠い”存在であることへの驚き

- ・国後島と貝殻島が「目で見えるほど近い」ことに驚いた。
- ・近いのに行くことができない現実を実感し、不法占拠の問題を身近に感じた。

元島民の切実な思いに心を動かされた

- ・元島民の「帰りたい」という言葉の重みを強く受け止めた。
- ・家や生活を奪われた体験に触れ、戦争の理不尽さを痛感した。
- ・高齢化が進む元島民の思いを「今、聞くこと」の大切さを感じた。

北方領土問題は“現在進行形”であるという理解

- ・漁業への制限、拿捕の危険、莫大な協定金の支払いなど、今も地域に影響が続いていることを知った。
- ・歴史ではなく「今の暮らし」に直結する問題だと実感。

北海道の人々の強い返還への思いに触れた

- ・資料館や展望台、祈りの火、返還運動の展示から地域の継続した取り組みを知った。
- ・北海道では日常的に問題意識が共有されていることを学んだ。



北方領土館からみた国後島



四島のかけ橋

【素材提供：独立行政法人北方領土問題対策協会】

北方領土青少年等現地視察事業 研修報告用パネル（A1サイズ）

⑤

北方領土青少年等現地視察事業を 終えて参加者からの感想②

自分の学びを“周囲に伝えたい”という意識の高まり

- ・「無関心でいてはいけない」との気づきが多く参加者に共通。
- ・自分事として考え、学んだことを家族や学校などへ広めたいと感じた。
- ・次世代へつなぐ必要性を実感した。

平和について考えるきっかけになった

- ・戦争は民間人を苦しめるだけでなく、武力ではなく対話が必要だと感じた。
- ・ロシア人住民との交流を語った元島民の姿から「憎しみでなく理解を」の大切さを学んだ。

現地で“見て・聞いて・体験する”重要性の実感

- ・教科書だけでは得られない理解が深まり、北海道の自然・生活・文化も知ることができた。
- ・酪農体験や地域の暮らしを通して、国境問題と生活の結びつきを学んだ。



北方館訪問の様子



酪農体験の様子